

歌人は居ながら名所を知る

大谷 雅夫
京都大学文学研究科

1951年生まれ。現在、京都大学大学院文学研究科助教授（国語学国文学専修）。専攻は、初期には、日本近世思想、近世文学、漢文学、近年は、上代文学から、中古文学の研究へと幅を広げている。新日本古典文学大系（岩波書店）の『日本詩史 五山堂詩話』や、『万葉集』の註釈を担当し（ともに共著）、日本文学の中で、これまで気づかれていなかった中国文学の影響を指摘し、万葉集を初めとして、中古の和歌・和文に到るまで、新しい解釈を提出し続けている。

一

ふるきをたづねてあたらしきをしる

歌人は居ながらめいしよをしる

江戸時代初期の俳諧書『毛吹草』に書き抜かれた当時の諺の一对である。学問の意義を教える孔子の言葉、「故きを温ねて新しきを知る」（論語・為政篇）とは、今なお知らぬ者のない格言である。しかし、それに対する「歌人は居ながら名所を知る」は、今は見聞きすることのまれな、忘れられた古諺であろう。

意味はだいたいの見当がつく。和歌には繰り返し詠まれる土地、たとえば吉野や龍田、飛鳥川や白川の関などの有名な場所がある。そのような名所を、歌人のだれもが実際に訪れて知っているわけではない。しかし、古い歌を学び、また自ら名所の歌を詠むことによって、その地の様子を知ることが出来る。歌人は、自分の書齋に座ったまま、各地の名所を熟知するというのである。

和歌に繰り返し詠まれた名所は、和歌の学問、歌学においては「歌枕」と呼ばれた。平安時代から盛んであった歌学の、その重要な仕事の一つに、歌枕の類聚があった。

たとえば藤原清輔『和歌初学抄』は、「所名」として、山・岡・原・野……の部類ごとに、数多くの地名を国別に列挙する。その冒頭の部分。

山

山城 くらぶ山 クラキヨシ又オモヒクラブルニヨメリ

同 おほはらやま スミガマアリ、オホカルコトニソフ

同 かめ山 イハヒニヨムベシ

和歌に詠まれる地名はこのように固定しており、しかも、その歌の内容も定められている。「大原山」は炭窯のある所として詠まれ、「亀山」は亀は万年という長寿に因んで賀歌に用いられる。また「くらぶ山」が「クラキヨシ又オモヒクラブルニヨメリ」とは、山の名の「くらぶ」に、その類音の語、「暗し」「比ぶ」の意味を掛ける決まりだという指摘である。特に「暗し」の意味を重ねる場合が多い。「くらぶ山」は日暮れ、夜中の歌に詠まれ、昼間の歌には木の下間や、散りかう花や葉または雲霧でほの暗い山道が描かれるのである。

そのように、歌に詠まれる地名は固定し、各々の地名は特定の意に用いられる。吉野は花、龍田は紅葉の名所として詠まれ、飛鳥川は「昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今和歌集・雑下）の名歌から人の世の移ろいやすさを、白川の関は都を遠く離れていよいよ陸奥に入るという羈旅の心を、それぞれに含意した地名となる。

そして「くらぶ山」を夜の山、または昼なお暗い山として描くように、たとえ花のない季節であっても、吉野山の歌には必ず花を咲かせる。藤原為家『詠歌一体』に次のように説くのである。

花さかぬ山にも花をさかせ、紅葉なき所にも紅葉せさせむ事は、唯今其所に望みて歴覽せむに、花も紅葉もあらば景気にしたがひてよむべし。さらではふるき事をいくたびも案じつづくべきなり。

おほよどの浦にも今は松もなく、住吉の松にも浪もかけず。されどもなほいひふるしたるすぢをよむべし。ながらのはしなどは昔より絶えにしかば、ことふりたり。水無瀬川水あれども水なしとよむべき也。

たまたま花の吉野山を目のあたりにできれば、その景色を描写すれば宜しい。しかし眼前に花がない場合は、「ふるき事」「いひふるしたるすぢ」、つまり古歌の表現と趣向に倣って歌を作れと言うのである。

従って、歌人はその土地に立ち、歌枕の具体的な姿を見て、それを描写する必要はない。のみならず、その土地がどこの国にあるかという最低限の知識すらも要しない。そんな極論もありえた。室町時代の歌人正徹の有名な言葉である（『正徹物語』）。

人が「吉野山はいづれの国ぞ」と尋ね侍らば、「只花にはよしの山、もみちには立田を読むこと、思ひ付きて、読み侍る計りにて、伊勢の国やらん、日向の国やらんしらず」とこたへ侍るべき也。いづれの国と云ふ才覚は覚えて用なき也。おほえんとせねども、をのづからおぼえらるれば、吉野は大和とする也。

歌人に求められるのは、地理の知識（才覚）ではない。吉野は大和国とは、知らず知らずに覚える、いわば副次的な知識であって、肝腎かなめなのは「花にはよしの山、もみちには立田」という表現の約束である。その約束事は、古歌を読み、あるいは歌学書を学んで得るべきもの、すなわち書齋に居ながらにして知るものであった。

「歌人は居ながら名所を知る」とは、このような歌枕の思想から生まれた諺であった。

ところが、近代の表現の基調をなすものは写実主義である。「或る景色又は人事を見て面白しと思ひし時に、それを文章に直して読者をして己と同様に面白く感ぜしめんとするには、言葉を飾るべからず、誇張を加ふべからず只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模写するを可とす」（正岡子規「叙事文」）。そのような写実主義にとって、目の前に咲いてもいない花を咲かせ、水の流れる川を「水なし」と古歌の通りに詠うことは、笑うべき愚挙でしかなかった。正岡子規は、和歌改革者として次のようにも論じるのである（「人々に答ふ」）。

名所といふ事については、古来歌よみは大なる謬見を抱きあたり。昔の歌よみは、いはゆる名所なる者を一度も見ずしていい加減に歌に詠み込む者なれば、その名所の歌といふも多くはその地の特色を現したる者に非ず、ただ古歌に拠りてどこそ

こは千鳥の名所なり、どこそこは山吹の名所なりといふに過ぎず。さればその地に千鳥が啼かずとも、その地に山吹が咲かずとも、固よりそれらに頓着あるべくもあらず、……いやしくも客観的に詠む場合、即ち景色を詠む場合には、その地を知らざれば到底善き歌にはなるまじ。……それを京都の外一步も踏み出さぬ公卿たちが、歌人は坐ながらに名所を知るなどと称して、名所の歌を詠むに至りては乱暴もまた極まれり。……

明治の新時代に歌枕は否定され、そして「歌人は居ながら名所を知る」という諺は、諺としての生命を断たれたのである。

現代の二つのことわざ辞典の記述を紹介しておこう。

『新明解 故事ことわざ辞典』（三省堂）は、意味の解説のあとに、わざわざ、「歌枕をもとにして作歌するとややもすれば観念が固定化し、発想が類型化する恐れもある」と付言する。

また『成語大辞苑 故事ことわざ名言名句』（主婦と生活社）も、意味の解説のあとに言う。「——これが表の意味。しかしその裏で「知る」の内容は、現実の土地の実感からは遊離した、観念的類型的な名所観にすぎない——として、体験から遊離した観念的知識をもてあそぶことへの皮肉を込めているのである。使用例 あなたは国外に一步も出たことがないのに、どうしてニューヨークやロンドンの街の様子に詳しいのかね。小説や詩をたくさん読みあさったからだって。なるほど〈——〉の類いだな。」

今日、この諺が辛うじて用いられる場面があるとしたら、それは皮肉でしかない。

諺の零落した姿である。

しかし、もちろん近代以前は違った。『毛吹草』に、『論語』の「故きを温ねて新しきを知る」の語に並べられていたことは、先に見た通りである。のみならず、さらに古く、思いがけない場面に、この諺は生き生きと肯定的に用いられていたのである。

『平家物語』。源義経が、一ノ谷の平家の陣営の背後、鶴越の急坂から軍勢を落とそうとする場面である。東国の源氏軍に、この山の様子を知る者はいない。その時、武蔵国住人の平山季重が、「季重こそ案内は知て候へ」と申し出る。しかし義経は、「わどのは東国そだちのもの、けふはじめてみる西国の山の案内者、大にまことしからず」と聞き入れない。そこで、

平山かさねて申けるは、「御ちやうとおほえ候はぬものかな。吉野・泊瀬の花をば歌人がしり、敵のこもつたる城のうしろの案内をば、剛のもの

がしる候」と申ければ、是又傍若無人にぞ聞えける。

「吉野・泊瀬の花をば歌人がしり」とは、諺としての形は整わないが、歌人は居ながらにして見もせぬ名所の花を知るの意味である。同じように、戦を学んだ者も、「けふはじめてみる」敵城の背後の山の様子を熟知する。歌の学も戦の学も、それを学ぶ者は、限られた、己一個の経験を超える事実を知るのだという主張なのである。

十五世紀はじめに書かれた連歌論書「初心求詠集」にも次のように言う。

（それ歌道は）……思はざる時を春秋にうつして飛花落葉の観念をもよほし、居ながら心を東西にめぐらして名所旧跡の勝地をしるも、ただこの道の徳なるべし。たれの人か偏執の思ひをなさむ哉。いづれのともがらか数寄の心ををろかにせむ哉。うかうかと日を過ごす中に、春の落花の歌、秋の落葉の歌に触れて、世は無常であるという理に気付かされること。そして、心を遠く東西に馳せて名所旧跡の好景を知ること。その二つのことどもが、歌道の徳、和歌の効用として挙げられているのである。世の理を知り、耳目の及ばぬ遠国を想像する、その歌の効用によって、人は「偏執のおもひ」、己の心の偏りを免れることができる。歌の風雅は、それゆえにこそ、人の生に不可欠なものとしたのである。

二

実際、歌の表現を学ぶことは、飛花落葉の歌の場合がそうであるように、ものの見方、認識の方法を知ることにならなかつた。さらに一つの例を紹介しておきたい。

順徳院「八雲御抄」に歌枕を列挙するところがある。その「山」の部の「よしの」の項を見よう。

よしの（岩のかけ道。そでふる山これをいへり。
みよしの。花。霞。雲。霧。月。雪。松。滝。み
よしの、まきたつ山といへるもよしの也。）

最も簡単に言ってしまうと吉野は花。しかし、それだけではなく、他にも色々な言葉が吉野の歌には詠みこまれる。「花。霞。雲。霧。……」。このうち「花」「霞」「霧」は、実際の吉野山の景物である。しかし「雲」は、それらとは性格が異なる。それは真実の雲ではなく、峯に咲く花の譬えなのである。

たとえば散る花をまるで雪のようだと詠い、山桜の花を雲かと見誤る。その場合の「花の雪」や「花の雲」を、歌学では「にせもの」と言う。その「にせもの」

の「花の雲」を初めて歌に詠んだと考えられるのが「古今和歌集」の撰者の一人、紀貫之であった。

【古今和歌集】春上

桜花さきにけらしもあしひきの山のかひより見ゆる白雲

【亭子院歌合】（十巻本）

山桜さきぬる時は常よりも峰の白雲たちまさりけり

【後撰和歌集】春下

白雲と見えつるものをさくら花けふはちるとや色ことになる

【貫之集】

山の甲斐たなびきわたる白雲は遠き桜のみゆるなりけり

貫之作と伝えるこの四首の歌に、桜の花を「雲」と見る表現が初めて見られるのである。

ただし貫之自身は、「古今和歌集仮名序」に「春の朝、吉野山の桜は、人麻呂が心には、雲かとのみなむ覚えける」と述べている。柿本人麻呂の表現だと言うのである。しかし「万葉集」の人麻呂歌にはそのような歌はない。そもそも「万葉集」では吉野は屢々出てくるが、吉野の桜を詠じた作は一首もない（奥村恒哉「歌枕考」）のである。「人麻呂が心には」とはおそらくは貫之の韜晦であり、花を雲と見る歌の最初の作者は貫之自身であったかと推察するのである。

そして、それに倣って、花を雲と見立てる歌は、それ以後ほとんど無数に詠い続けられ、さらには遠く明治の小学唱歌や、有名な琴曲「さくら」などに至った。

春のやよひ

春のやよひの。あけほのに。

四方のやまべを。見わたせば。

はなざかりかも。しらくもの。

かゝらぬみねこそ。なかりけれ。

（『唱歌集 初編』明治十四年）

さくら

さくら さくら

弥生の空は 見渡すかぎり

霞か雲か 匂ひぞ出づる

いざや いざや 見にゆかん

（『箏曲集』明治二十一年）

千年もの間、日本人は、桜の花を白雲と見る見方を歌によって教え、教えられてきたのである。

花を雲と見ることは、このように日本の歌に深く染みついた見方であったが、それは、おそらくは中国の詩の影響により生まれたものであっただろう。

十世紀半ばの日本で編纂された「千載佳句」という

詞華集に、何玄という中国の詩人の次の詩が収められているのである。

看花	何玄
莫恠出門先驟馬	怪しむこと莫かれ門を出でて 先づ馬を驟（は）することを
暮年常怨看花遲	暮年常に怨む花を看ることの 遅きを
可憐尽日春山下	憐れむべし尽日春山の下
似雪如雲一万枝	雪の似（ごと）く雲の如し一 万の枝

山の麓で花を看て遊ぼうというこの詩に「雪の似く雲の如し」とあるのは、花を雪と雲とに見立てるものに他ならない。

『古今和歌集』成立の前後は、和歌が漢詩の様々な表現方法を、もっとも食欲に学びとった時代であった。『萬葉集』にはなく、貫之の数首に突如あらわれる、花を雲と見立てる新たな表現は、例えばこのような詩句の影響下に成ったのではないか。何玄の詩は本国では逸し、またその表現の類例を本国の詩に見ることも必ずしも多くはない。しかし、日本では早くに受容されて、和歌の表現に広く深い影響を及ぼしたかと考えるのである。

さて、その上で詩と歌の表現を比較してみたい。詩も歌も、ともに花を雲に譬えるのだが、すべてが同じというわけではない。詩歌の間には、当然異なりがある。作者と花の距離感は甚だ相違すると思うのである。貫之の歌の「山のかひより見ゆる白雲」は、山のあわいを遙か遠くから眺める表現である。唱歌の「四方のやまべを。見わたせば」も同じ。「いざや、いざや、見にゆかん」も、これから花の下に赴こうと詠うものである。それに対して何玄の詩句は、馬を馳せて見に来た花を、「雪の似く雲の如し」と形容する。作者はすでに花の木のもとに居るのである。すなわち、歌は花を遠景として見て、詩は目前の花を眺めている。その距離に違いがある。

そもそも、漢語の「如雲」とは、もくもく広がる雲のように量の多いことの形容である。たとえば「女有り雲の如し」（詩経・鄭風「出其東門」）のそれは、「如雲は衆多なり」（毛伝）と解される。「雲霞の如し」という成語にも、その意は明らかであろう。同様に、「雪の似く雲の如し一万の枝」とは、花の下に来た作者が、見上げる花を、おびただしく広がる白雪、白雲と見た表現なのである。

そもそもこの詩の「看花」という題、花をじっと見るといふその詩題も、作者と花の距離の近さを示して

いる。他にも「看花樹」「把火看花」など、中国の花の詩の題には「看」の字が目立つのである。また「賞花」「対花」「見花」「就花枝」「花下作」「玩花」等々。いずれも花を近くに見ての作である。詩人がどのように花を見ることを好んだか、それらの詩題は端的に示すことであろう。

それに対して、花を雲と見る歌は、遠山の花を山の端にかかる雲と見る。遠目に花を眺めるものである。さきの貫之の歌にあったように「遠き桜のみゆるなりけり」なのである。

ついでに、『古今和歌集』の花の歌を五首だけ抜き書きしてみよう。

山高み人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見
はやさむ
山ざくらわが見にくれば春がすみ峰にも尾にもた
ち隠しつゝ
誰しかも求（と）めて折りつる春霞たちかくすら
む山の桜を
春霞なに隠すらむ桜花ちるまをだにも見るべきも
のを
山高み見つつ我が来しさくら花風は心にまかすべ
らなり

花を手折り、花瓶に挿すという歌がないわけではない。しかし歌人たちは、むしろ、霞にこめられて見えない花、手の届かない高処に咲く花を詠むことを好んだのである。彼らの興味は、手に触れられず、見えない花に向かいがちであった。遠山の花を雲と見る歌も、おそらくは、そのような美意識に繋がるものではないだろうか。

歌人は、この吉野の歌を読み、詠うことによって、知らず知らずのうちに、花の美の一つの見方を学んだのである。

三

歌によってものの見方、認識の方法を学ぶことは、むろん名所の歌には限らない。歌に詠むさまざまな自然の景物について、それをどのように見るべきか、感じ取るべきかという大変微妙な美意識をも、歌人は歌によって身につけたのである。

たとえば、鴨長明『無名抄』は、歌の題に相応しい詠み方を次のように教えている。

假令郭公などは、山野を尋ね歩いて聞く心をよむ。鶯ごときは待つ心をばよめども、尋ねて聞く由をばいとよまず。又鹿の音などは聞くにも心細く哀なる由をばよめども、待つ由をばいとよまず。

……又桜をば尋ぬれど、柳をば尋ねず。初雪などをば待つ心をよみて、時雨・霰などをば待たず。花をば命にかへて惜しむなどいへど、紅葉をばさほどには惜しまず。

ウグイスは春、ホトトギスは夏、どちらもその初声を待望する心を歌人たちは繰り返し詠んだが、しかし、野原に聞きに出ることを詠うホトトギスに対して、ウグイスは家に居て待つばかり。また鹿の声は、桜は、柳は……と、様々な景物にまつわる情緒の違いが数えあげられる。名所にそれぞれ特定の詠まれ方があったように、歌の景物にも特有の情緒が伴ったのである。歌人は、それらの景物を詠う場合、その固有の情緒、そのどこに、どのような興味や感動を覚えるべきかを承知しておく必要があった。歌人は、歌を詠むことを通して、諸事万物の見方、感じ方を学び取ったのである。

『野語述説』（松井精撰、貞享元年（一六八四）成立）という諺の解説書がある。そこに次のように言う（原漢文）。

歌人居知名所

愚曰く、歌人は居ながら名所を知るとは、言ふところは、歌人跬歩を挙げずして天下の名山大川勝地を知るとなり。何となれば則ち、その書を読んで、心目の間に瞭然たればなり。蓋し和歌の道たるや、大率（おほむね）詩の三百篇に擬す。故に古人の賦する所、天地万物の理、邦国山川の変、飛潜動植の微、人倫日用の彝、三十一言に括囊せずといふ者無し。是れ我が国風・神道の至妙これを議すべからざる所以なり。……

諺の意味の解説のあとに、「蓋し和歌の道たるや」云々と論じるのは、必ずしも論理的な展開とは言えないだろう。しかし、その文勢は、要するに、歌の中に名所の知識がこめられていることからの類推、発展として、その三十一文字のなかに、この世の森羅万象の道理、地理の変化、動植物の様々、人の世の倫理など、すべてが含まれることまで説き至ろうとするものである。歌人は、歌を詠むことによってそれら全てを知る。つまり諺の「名所」は、ここでは「人の世すべて」に拡大されるのである。それは飛躍ではあるが、必ずしも暴論とは言えない。歌が歌人に名所の知識を与え、ものの見方を教えるとするならば、万物の理、人の道をもまた、歌は人に知らしめるものだと考え得たのである。

上に「大率詩の三百篇に擬す」とあった、その「三百篇」とは中国の『詩経』のことである。『詩経』の詩も、歌と同様に、次のように論じられた。

江戸時代の儒者、伊藤東涯の『読詩要領』という『詩経』論である。そこで東涯は、「詩は人情を道ふ」ものだと説く。詩は人の心のありのままの表現であると言うのである。そして、その基本的認識に基づいて、東涯は、『論語』に見られる孔子の言葉、「小子、何ぞ夫の詩を学ぶこと莫きや、詩は、以て興すべし、以て観つべし……之れを邇（ちか）くしては父に事（つかふまつ）り、之れを遠くしては君に事る。多く鳥獸草木の名を識る」（陽貨篇）の中の、「（詩は）以て観つべし」について、

詩は人情をつくしたるものゆへ、山水風烟を観覽するがごとく、世間の人の有さま、さまざまあることをしるなり、

と解説する。人情の表現たる詩を読むことによって、世間の多くの人々のさまざまな心を観察し、理解することができる、それが「観つべし」の意味だと言うのである。そして、同じ孔子の言葉の結び、「多く鳥獸草木の名を識る」については、

さて、その餘波には、おほく鳥獸草木の名を覚へしるとなり。是は、世のことわざに、「歌よみはゐながら名所をしる」といふがごとく、世俗一等の人は、『庭訓往来』をよみて、国々の物産・名物をしるも、又学問なり。そのかみにありては、詩をよみて、多く鳥獸草木の名をしるも、同じこととなり、

と解釈する。

孔子の言葉を追った解説であるので、一貫した論旨は必ずしも捉えやすくはない。しかし察するに、東涯は、詩歌によって名所を知り鳥獸草木の名を知ることと、『詩経』によって世間の人情の様々を理解することとは、本末の異なりはあるにしても、等質のことだと考えているのではないだろうか。歌人が書齋に居ながら名所を知るように、『詩経』を学ぶものは、詩を読んで鳥獸草木の名を知り、ひいては、人の心のさまざまを知ることができる。己の見聞の限界をやぶって、森羅万象、人情世態を広く知る、それが『詩経』を学ぶことの徳だとするのである。

同様の思想は、東涯と同時代の儒者、荻生徂徠の『詩経』論には、より明らかに見て取ることができる。『経子史要覧』の中の『詩経』論である。

（詩経の国風は）日本ノ萬葉集ノ歌ノゴトシ。…其篇ノ中ニハ。男女夫婦ノ情モ云テアリ。親ヲ思ヒ子ヲ思フコトモアリ。又君ヲ恨ミ夫ヲ怨ムコトモアリ。刺ルコトモ美ムルコトモ云テアリ。貧士ノ仕宦ニ苦勞スルコトモアリ。凡世間ニアルトアラユルコト。貴賤・貧富・善否・美惡・皆云尽

セリ。コレニテ。世ノ風儀國ノ風俗モ心ニウツリ。吾心モ自ラニ人情ニユキワタリ。高位ヨリ賤シキ人ノコトモ知り。男ガ女ノ情ヲモ知り。又賢キガ愚ナル人ノ心ヲモ知ラルル益アリ。……コノ三百篇ノ中ニハ。天子ヨリ庶人ノ事マデ。内外公私アラユルコトヲ尽シテノコトナシ。万事ノ情ヲ知ルモノナリ諺ニ歌人ハ坐ナガラ名所ヲ知ルト云ガゴトシ

東涯も徂徠も、『詩経』の詩を人情の表現と捉え、詩を読むことによって、己の狭い見聞によっては知られない人情の様々を理解することが出来るとする。そして、それが『詩経』を学ぶ功德だと考えているのである。

それは、朱子学の詩経観を批判し、克服する中に生まれでた新たな文学観であった。

知られるように、『詩経』には、男女の野合、不倫を詠う詩が少なくない。『論語』(陽貨篇)に「鄭声の雅楽を乱すを悪む」と言うように、鄭国、あるいは衛国の詩に姪事の詩が見られる。それをどう考えるか、儒学にとっての一大事であった。一方、同じく『論語』(為政篇)に「詩三百、一言以てこれを蔽へば、曰く思ひ邪無し」という言葉がある。愛欲の詩と「邪無し」の語と、互いをどう関連づけるのか、これも『詩経』の学にとっての大問題であった。朱子学は、それを、『詩経』における善き心の表現は、それによって人を正しい情性に導く(勸善)ものであり、男女愛欲の詩は、悪を憎ませる心に人を導く(懲悪)ものだと説き、そして、「思ひ邪無し」とは、その勸善懲悪の教えの結果、読者の心が「邪無し」となるのだと論じたのである。「邪無し」の解釈はやや強引ではあるが、要するに、詩経の詩は、人に何が善で、何が悪かを示して、人を邪なき心に導くものだと考えたのである。

その勸善懲悪説は日本の文学観に大きな影響を与えたものであるが、伊藤東涯『読詩要領』は、それを明確に否定する。詩は善悪を示すものではない。それは、孔子の言葉「思ひ邪無し」の通り、「人の心におもふことをありやうに言あらはしたるもの」である。詩は人の心のいつわりなき表現である。だから読者は、その詩を見れば、ひろく世間の人情に通ずることができる。そして人情を広く知るならば、自ずから温厚和平の心となる。人は詩を読むことによって、人に対して寛容になれると論じたのである。「詩を能く読み得て、世間の人情に通ずれば、自づから温厚和平の気を生じ、人に交りて無理なることを言かけられ、不届をしかけられても、ふかくとがめざるなり」(『読詩要領』)。また徂徠も、「(詩は)言葉を巧にして人情をよくのべ候

故。其力にて自然と心こなれ。道理もねれ。又道理の上ばかりにては見えがたき世の風儀國の風儀も心に移り。わが心をのづからに人情に行わたり」(徂来先生答問書)云々と説いたのである。

東涯と徂徠の『詩経』観は、つまるところ、人情の表現たる詩を読むことによって、人の心に広く通じ、他者に対する寛容の心を涵養するというものであった。そして、その文学論のなかで、「歌人は居ながら名所を知る」という諺は、詩歌によって人情を知るという意の要語となったのである。

国学の文学論においても、それはほぼ同様であった。本居宣長が、歌の徳とは、「もののおはれ」を人に知らしめるところにあると論ずる『石上私淑言』の一節である。

富る人は貧き人の心をしらず。わかき人は老たる人の心をしらず。男は女の心をしらず。世の諺にも親の心子しらず共、又子をもちて親の恩はしるともいへるに、兼輔中納言の

人のおやの心は闇にあらね共子をおもふ道にまどひぬるかな

といふ歌……などをきけば。子もたらぬ人もをのづから親の心は思ひやられてあはれなるぞかし。此外の事もみなこれと同じ心ばへにて。世の人のをのがさままほどにつけつつみのうへにおもふ心は。みなよくみてしらるれば。みづから其事にふれねども。其事の心ばへをおもひしるは歌也。人の情のやうを深く思ひしるときは。をのづから世のため人のためにあしきわざはせぬ物也。これ又物のあはれをしらす功德也。

「みづから其事にふれねども」とは、実際に身をもって経験しないけれどもの意味。つまり諺の「居ながらにして」に相当しよう。そして「其事の心ばへをおもひしる」とは、「名所を知る」ではこの場合なくて、人の心を知ることである。つまり歌人は居ながらにして人の心を知る、それが歌の効能なのだと言うのである。

また、宣長は、この書の別の箇所では、江戸の町人が平安時代の貴族のような立場で詠ったり、遠い国々の海山を目の前に見るように詠ったりすることについて、次のように言う。

これはた下れる代に生れながらいと上つ代の人心をもをおしはかり。かみなる人は下が下の有様までくはしくおもほしやり。下なる者もかみさまのやうをつまびらかにうかがひしりて。かたみに其身のうへにあづかりしらぬ事も。をしはかられ思ひしらるる歌の徳にはあらずや。又はるかに遠き

浦山をもめのまへに見たらんやうによみなすも。
同じ心ばへにて。これもただ古へにならふものなれば。しれる所もしらぬ所も。何のさはりかはあ
るべき。

このうち、「はるかに遠き浦山をも」云々は、他ならず「歌人は居ながら名所を知る」の諺を下敷きにする文章であろう。古歌に詠まれた名所を詠う場合に、自分の知る場所か、知らない場所かを問わずに詠む。それは、古えの貴人の心に立って歌を詠むことと「同じ心ばへ」なのだと言う。名所の歌を詠むことによって名所の情趣を知るように、たとえば光源氏のような「よき人」の心さえ、その人に倣った歌を詠むことによって、下れる世の町人にも理解しようと考えたのである。

寛政十二年、七十一歳の宣長は、学問の喜びを詠う「ふみよみ百首」を作った。その内の数首を引用してみよう。

ふみよめばやまともろこしむかし今よろづの事を
しるぞうれしき
書よめばくはしくぞしる天の下ゆかぬ国々よもの
うみやま
書よめばむかしの人はなかりけりみな今もある我
友にして
書よめば千里（ちさと）のよその事までもただこ
こにしてめに見るごとし
おもしろき山川見つつゆけばかも書見る道はくる
しくもあらず
もろもろのふみ見る道はよるひると千里ゆけども
足もつかれず

宣長の敬愛した契沖にも、「披書知古」という歌題の歌に「家ながら千里やは知るからす羽にかけの文しもなきにまされり」があった（『寶光遺篇』）。烏の羽に墨書したような難読の書（『日本書紀』敏達天皇紀）ですら無きにはまさる。読書は、家に居ながらにして千里の外、はるかな古代を知らしめるものとして重んじられるのである。さきに、『毛吹草』に「哥人はるながらめいしよをしる」が『論語』の「ふるきをたづねてあたらしきをしる」に並べられていたことを紹介した。和漢の二つの語は、学問の意義を教える箴言として、あい拮抗する重みをもったのである。

伊藤東涯、荻生徂徠、本居宣長。彼らの文学観の根底には、己の見聞、体験はごく限られた偏頗なものであり、それによっては人の心は理解できないのだという直感があった。人はそれぞれ異なる立場にあって、異なる心をもつ。そうである以上、一つの道理によって自他をおしなべて理解することは不可能である、と

いう認識があった。そして、その中にあって、互いの心を理解させるのが人情の表現たる詩歌である。その詩歌を学ぶならば、やがて遠く隔たる他人の心をも、見もせぬ名所を知るようにはるかに思いやり、それにやさしく同情することができる、温厚にして心こなれた人となることができる、と考えたのである。

彼らにとって、文学と道德とは不可分のものとしてあったのである。

正岡子規が「歌人は居ながら名所を知る」という諺を否定したのは、写実主義の立場の表現論においてであった。しかし、近代の思想は、その諺と共に、詩歌によって人情を知り、物のあはれを知り、よき人になるという詩歌観をも捨ててしまったのではないだろうか。

そして私たちは、それに代わるべき文学観を、果して得たのであろうか。古典を読む意義はどこにあるのか。私たちはいま、その問いの前に立っているのではないだろうか。

四

最後に、このシンポジウムのテーマにも関わって、和歌の「創造性」について言及しておきたい。

先に述べたように、歌枕はほとんど固定し、それを詠む歌の内容も定まっていた。和歌にとって、類型的・観念的という非難は、おそらくは免れようのないものであった。しかし、その中でも、歌人たちは様々な工夫を凝らした。花を雲と見るという一連の歌でも、古い趣向の上に新しみが求められた。西行は山の端ごとの白雲を見て、「おしなべて花の盛りになりけり」と詠い、家隆は「雲もさくらに埋れて」と、新しい作意を試みた（『初学一葉』）。和歌は、旧来の表現方法に新しい発想を盛り込むことによって、創造を重ねてきたのであった。藤原定家はそれを「ことばはふるきをしたひ、心はあたらしきを求め」（『近代秀歌』）ることだと説いた。古い言葉に新しい心を賦与することを求めたのである。それはたいそう難しいことであったが、歌人は一つの諺を用いてこれを説くことを好んだ。「人心不同如面」という中国の古い諺である。

たとえば、二条為世は、『和歌庭訓』において、曾祖父にあたる藤原定家の教え「心はあたらしきをもとむべき事」について次のように述べる。

此事は古人をしふる所、更に師の仰せにたがはず。但、新しき心いかにも出来がたし。よゝの撰集、よゝの歌仙、よみのこせる風情あるべからず。されども人の面のごとくに、目はふたつ横ざまに、

鼻はひとつ縦ざまなり。昔よりかはる事なけれども、しかも同じ顔にあらず。されば歌もかくのごとし。花をしら雲にまがへ、木の葉を時雨にあやまつことは、もとより顔のごとくにははらねども、さすがおのれおのれとある所あれば、作者の得分となるなり。新しきを求むとて、様あしくいやしげなる事どもを求めよむこと有るべからず。

花を白雲に見まちがえる、また木の葉の音を時雨に聞き違えるという常套的な表現方法（風情、または趣向と言う）は、人の顔の目や鼻のようなものと言うのである。それは誰も同じものだが、結果として一つとして同じ顔はない。そのようにして、同じ趣向を用いながらも、歌には必ずから個性が現れるものだと説くのである。新しみを求めるあまりに卑俗な表現に走るな、目を縦に、鼻を横にするようなことをするな、という戒めのための論ではあるが、それにしても、創造性については楽観的な見方をしていたと言えよう（拙稿「人心不同如面」・和漢比較文学叢書7）。

そのように、目鼻は同じで、顔かたちが全く違ってしまった例の一つ挙げてみたい。

【新古今和歌集】冬歌。

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野の渡りの雪の夕暮

という藤原定家の名歌である。にわかな雨や雪を、昔の人は袖をかざして笠代わりにして避けたのだが、その袖笠に積もった雪を振り落とそうにも、身を隠す物陰、家の軒先が見あたらないという、寂しい雪の夕暮の景を詠うものである。

この歌が、【萬葉集】の長忌寸奥麻呂の歌、

苦しくも降りくる雨か三輪の崎佐野の渡りに家もあらなくに

を本歌とすることは、古くから指摘される通りである。「佐野の渡り」という地名を【萬葉集】に得て、そして本歌の「雨」を「雪」に転じてみせた、それが定家の歌なのである。

それだけではない。先に述べたように、歌枕は特定の詠まれ方をする。「佐野」という歌枕は、萬葉の「家もあらなくに」の句からの連想で、人家がないという意に用いられる。それが表現の約束であった。

【八雲御抄】には、

渡

さのの（万。みわのさき。家なし・さのの渡は家なしと万葉にもいへり。）

とある。

すなわち、藤原定家は「佐野の渡り」という歌枕を

用い、「雨」を「雪」に転じたばかりでなく、奥麻呂の歌の「家なし」という心を、「袖うちはらふかげもなし」という言葉に具象化してみせたのである。本歌取の手本とされるに相応しい、鮮やかな転換と言うべきであろう。

しかし、ここには大きな誤解があった。奥麻呂の歌の「家もあらなくに」の句は、雨宿りする人家がないのにという意味では、実はない。【萬葉集】の旅の歌に見える「家」とは、旅の宿りではなく、すべて自分の家族のいる、自分の家庭を意識する言葉であった。従って、この歌は、旅先で雨に打たれて、ここに我が家があったら、我が妻が濡れた衣を干してくれるのに、その家はないのだという嘆きを詠うものである（真鍋次郎「家もあらなくに」（萬葉七二号）。「家もあらなくに」とは、「我が家もあらなくに」なのである。【八雲御抄】や藤原定家はそれを誤解した。そして、その誤解の結果として、雪の夕暮のどこにも袖を払うべき物陰がないという叙景の表現が生まれたのである。

これはむろん一般化できる例ではない。しかし、新しい心とは、求めて得られるものでは必ずしもなく、瓢箪から駒という例も、実は多いのではないだろうか。人の顔が違うように、歌の表現にはそれぞれ個性があり、時代性がある。萬葉の叙情に対して、新古今は叙景。そのような表現の時代差があって、「家もあらなくに」の叙情は、「かげもなし」の叙景に転じえたのではないだろうか。同じ歌枕、同じ表現方法を用いても、歌はそれぞれに新しく成らざるを得なかったのである。

問題は、それらの歌枕、古い歌の言葉の多くが、今日では忘れ去られていることである。遠山の桜を雲と見るという表現、その花の見方は、小学唱歌を最後にして滅んでしまった。私たちは、今そのように花を見ることはないだろう。歌枕も、その地形そのものを含めて、失われて久しい。

そのような古い言葉なくして、新しい心は果して可能であろうか。

すでに忘れられた歌枕、歌の言葉を少しずつ思い出すこと。私たちが古典を読む意義の一つは、そこにあるのではないだろうか。